

# 子ども相互の承認活動が自己有用感に及ぼす影響

学籍番号 229201  
氏名 稲田 光  
主指導教員 柿 慶子  
副指導教員 庭山和貴

## 1. 研究の背景

近年、小学校においても不登校が増加している。文部科学省（2022）の『生徒指導提要』では、不登校対策につながる発達支持的生徒指導として、心の居場所についての必要性を示していることから、不登校の支援として、居場所がキーワードとなるのではないかと考えた。先行研究や『生徒指導提要』では、小学生の居場所感は自分が認められることが条件として重要であり、自分が受け入れられ、安心してそこにいられるという場所が居場所であるとしている。子どもが居場所を感じるためには、自分が他者から評価されて、「人の役に立った」「人から認められている」と感じる肯定的な感情である自己有用感の向上が必要だと考えた。

## 2. 基本学校実習Ⅰ・Ⅱでの取り組み

実習校はA市にある小学校である。実習では学習に困難を示す子どもの支援をしたり、積極的に子どもとコミュニケーションを図ったりすることを心がけた。筆者が主体的に子どもに関われる場として清掃活動に注目したところ、トイレなどの場所では、積極的に取り組む子どもはほとんど見られなかった。そこで、じゃんけん等のゲーム的な要素と共に承認活動を取り入れることで、積極的に掃除に取り組むようになることが分かった。

## 3. 実践課題研究Ⅰ：自己有用感に関する質問紙調査

小学校5年生31人を対象にどの程度自己有用感を感じているのかを質問紙調査を通して明らかにした。調査の結果、ある程度自己有用感を感じているものの、「人の役に立っている」等の役割感が不足している子どもが多いことが分かった。また、クラスの友達から「認められる（褒められる）」ことが少ない子どもがいることが分かったため、互いを認め合い、子どもが自身のことを「クラスの中で役に立っている」「クラスの中で必要な存在である」と意識できるような取り組みが必要だと考えた。

## 4. 授業実践（その①）と実践後の質問紙調査

1回目の質問紙調査の結果からは、実習校の対象のクラスの子どもは自己有用感の中でも役割感が低いこと、観察（プロセスレコード）からは掃除活動に対して、マイナスイメージを持

ち、自ら進んで取り組めていない子どもが多いことが分かった。そのため、特に清掃活動において役割感を実感し、自己有用感を高めていく特別活動の授業を計画し、その後の子ども同士の承認活動（「サンキューカード」）の取り組みを併せて行った。授業での子どもの感想には「役に立つと言われると嬉しい」「これからも役に立ちたいと思う」のように、友だちに認められることに喜びを感じ、今後の活動に前向きな子どもが多かった。授業後、清掃活動に消極的だった子どもが友達の頑張りをカードに書いていたり、掃除の時に友達に声掛けをしたりするなど行動にも変化があった。しかしながら、実践後に再度1度目と同じ質問紙調査を行ったところ、人の役に立っていることを意識する傾向は見られたが、自己有用感が向上しているという結果は得られなかった。

## 5. 授業実践（その②）と実践後の質問紙調査

1回目の授業実践とその後の質問紙調査の結果から、再度自己有用感が高まるような実践を考えていくこととした。筆者が注目している掃除の時間に関しては、積極的に取り組む子どもとそうでない子どもの差がまだまだ激しい様子が見て取れた。そこで、責任感に対する意識の欠如が課題だと考え、SELにある「責任ある意思決定」「自己のコントロール」を培うため、「ボランティアについて考え実行する」という授業実践を行うこととした。実践の中では、個々の意思決定を大切にしながら、1回目と同じようにお互いの良さを認め合う活動を再度取り入れた。そして、実践の効果を測るため、授業実践後に1・2回目と同じ質問紙調査を行った。その結果、統計的には有意に自己有用感が下がった。取り組みの期間が1週間という短期間であったこともあり、「自分がクラスの役にたっている」「クラスの友達が自分を認めてくれている」という実感が湧きにくい状況であったのではないかと考える。また、普段の子どもの様子を観察している中で、高学年特有の様々な悩みや発達段階等の影響により、潜在的な不満を持った子どもが増加した可能性もあるのではないかと考えた。

## 6. 総合考察

本実践研究では、小学生の自己有用感を高める取り組みとして、子ども相互の承認活動を取り入れた授業実践を2回行った。質問紙調査の結果としては、自己有用感の高まりは見られなかった。しかしながら、子どもの「認められてどうだったか」という感想の中では、人の役に立つことに更なる意欲を示すものなどの前向きな意見がほとんどを占めていた。また、観察の中では、今までより清掃活動に積極的に取り組んだり、他人への意識が高まり、友達を助けたりする等の様子も伺えた。このことから、お互いを認め合う時間を作ったり、教員の声掛けを工夫したりすることを通して、継続して認め合える環境づくりが大切であると考え。今回は特別活動で実践を行ったが、他教科や学校生活、日常生活で継続して活用・応用できるようにすること、他者の良さに気づくことはもちろん、自分の良さにも気づく取り組みを定期的に行っていくことが大切である。そうすることで、児童が安心して過ごせる居場所となる学級・学校になり、それが不登校の防止に繋がっていくのではないかと考える。